

i ntroduction

いまから30年以上前のことですが、私が学生だった時代には歯内療法はすでに完成された学問であり、もうこれ以上大きく変わることはないと感じていました。当時は、まさか「歯科用コンビームCT」で歯の断層撮影を行って診断する時代が来るとは思いませんでした。もちろん、盲目的に行われていた根管治療が顕微鏡で見ながら行うようになるとは、夢にも思いませんでした。そして、彎曲根管の形成は手用ファイルで工夫しながら時間を費やして行われていましたが、いまでは誰もがニッケルチタンロータリーファイルを用いることにより、短時間で行うことができます。

このように近年、歯内療法における器具・器材、薬剤などの進歩は著しく、読者の先生方が学生時代に習った歯内療法とは大きく様変わりしているのではないのでしょうか。

また、インターネットの普及により、患者さんも容易に最新の歯内療法に関する情報を得られる時代になったともいえるでしょう。それゆえ、患者さんから、「どうにか歯を抜かずに治療してほしい」という要望が、年々増えていると感じている先生も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

歯内療法の進歩・発展は、術者ばかりではなく、患者さんにも大きな恩恵をもたらしています。とくに、歯内療法の「三種の神器」ともいうべき、「マイクロスコープ」、「ニッケルチタン製ロータリーファイル」、「歯科用コンビームCT」の普及は、この分野に大きな変革をもたらしています。これらを使いこなすことにより、再治療などの頻度を格段に減少させることが可能です。とくに、従来から盲目的な治療を行わざるを得なかった根管治療において、“見える”治療が可能になったことは、術者のストレスを大幅に軽減させています。

その一方で、これらの導入コストや保険診療との兼ね合いから、これらを診療に導入することにいま一歩踏み出せない歯科医師も多く、保険診療における再根管治療の頻度が依然として高止まりしているのも事実です。しかし、2016年4月より、4根管歯、槌状根歯において、歯科用コンビームCTで検査をして、マイ

クロスコープ下で根管治療を行うと、根管充填時に保険診療で400点の加点が認められました。このように、保険診療にマイクロスコープを用いた根管治療の一部が認められたことにより、今後ますますこれらの普及が期待されます。

そのため、歯科雑誌の誌面を毎月のように歯内療法関連の記事が賑わせ、掲載されると販売部数が伸びるとの話をよく耳にします。また、巷では多くの歯内療法の講演会やハンズオンセミナーが開催され、いままさに歯内療法が注目されています。それだけ歯内療法の重要性を理解している先生が多く、同時に根管治療で日々悩んでいるのではないのでしょうか。

本書では、歯内療法の三種の神器である、マイクロスコープ、ニッケルチタン製ロータリーファイル、歯科用コンビームCTの他に、「歯髄細胞バンク」、「3Dプリント」、「MTA」、「バイオセラミック」、「Revascularization法」、「エマージェンシーパルポトミー」、「根管洗浄」、「根管充填の概念“モノブロック化”」、「根管治療後の術後疼痛」、「非歯原性疼痛」、「支台築造」など、歯内療法における最新のトレンドも取り上げています。それらの執筆については、わが国を代表する、それぞれの分野における第一人者の先生方に依頼し、開発経緯や製品の変遷、現時点でのメリット・デメリット、使用時の「+α」のポイントを解説いただきました。よって、本書は初心者からベテランまで、すべての臨床家に参考となる、歯内療法のバイブルであると自負しています。歯内療法のスペシャリストが、「1本の歯を残すために、どれだけ情熱を注ぎこんでいるのか」、その一端をぜひ感じ取っていただきたいと考えています。

本書が多くの臨床家に支持され、患者さんの歯内療法成功の一助となれば幸いです。

最後に、ご多忙中にもかかわらず快くご協力いただき、限られた紙数のなかでご執筆賜りました先生方に、心より感謝申し上げます。

2016年10月
編集委員 北村和夫